

# 『新アトランティス』とルネサンス・ユートピアの終焉

高橋 史朗\*

## *New Atlantis* and the Desition of the Renaissance Utopia

Fumiaki TAKAHASHI

### Abstract

There have been a number of scholars who evaluate Francis Bacon's *New Atlantis* quite highly in terms that it inaugurated a sub-genre of the utopian literature, that is to say, the scientific utopia. However, on the other hand, its primitive and naïve treatment of science and its progressive nature has been also a controversial topic in the terrain of utopian literary criticism. In this paper, we will discuss the relationship between Bacon's work and the development of the literary forms of the Renaissance utopia, and reconsider its historical significance in the traditions of utopian literature.

**Keywords:** utopian criticism, *New Atlantis*, Francis Bacon, utopian literary history

### I.

ユートピア (utopia) とは、不思議な言葉である。トマス・モア (Thomas More) の造語であるこの言葉によって、われわれは、他のジャンルの作品を読んだのでは得られない経験をユートピア物語の中で強制される。「よき場所」 (*eutopos*) でもあり「どこにもない場所」 (*ou-topos*) でもあるというこの言葉の両義性は、物語の解釈を分裂させ、ときには、解釈そのものを拒絶する力となる<sup>1</sup>。例えば、フレデリック・エンゲルス (Frederick Engels) にとって、ロバート・オーウェン (Robert Owen) の『新社会観』 (*A New View of Society*) とモアの『ユートピア』 (*Utopia*) は、ユートピアニズム (utopianism) という言葉でその政治性を一括りにできるが故に、同様に批判され、同一のジャンルとして扱われるべきものである<sup>2</sup>。このとき、オーウェンの政治的な論点は、非現実的な夢物語であり、解釈の余地は与えられていない。一方、プラトン

の『国家』 (*Republic*) をユートピア物語であると論じるときに、われわれは、その論述を小説として魅力あるものとまで解釈できる可能性を手に入れている。ユートピアが作り出す世界は、まさしく、その言葉が生み出したジャンルとしての力に拠っている。

しかし、この言葉のもつ魅力の故か、文学ジャンルとしてのユートピアの範疇は、拡大的に解釈され過ぎている。芸術的な批評を受けることを前提としていない前述のオーウェンの著作をユートピア的文学作品の一つと数えるのには、明らかな矛盾があるのは当然としても、「黄金時代」 (*Golden Age*) や「コケイン・逸楽の国」 (*Cockaygne*) をユートピア文学と位置付けるのには、さほど抵抗を感じないのは確かである。そのような、境界的なジャンルとしては、他にも、「地上楽園」 (*Earthly Paradise*) や前述のプラトンの著作が挙げられる。これら、モア以前の古典的なユートピアに近い形態の物語は、理想の土地を描いているという点で、ユートピア文学の範疇と確かに境界を接している。しかしながら、このジャンルがモアによって創生さ

平成 12 年 10 月 13 日受理

\* 総合教育センター・講師

れたという一点をとってみても、これらは、狭義のユートピアのジャンル、それは、モダン・ユートピアといってもいいだろうが、には含まれないのである。

その理由には、複数の点が挙げられる。第一に、過去との決別という点である。ノースロップ・フライ (Northrop Frye) は、以下のように主張する。

神話の観点からしか表現できない社会的概念が2つある。そのうちのひとつは、社会契約であり、これは、社会の起源を明らかにする記述である。もうひとつが、ユートピアであり、これは、社会生活が目指している究極の目的あるいは目標の想像上のヴィジョンを提示するものである。これらはともに、現実の分析、もしくは、神話を形作っているものに直面している社会の分析から出発して、その分析の結果を、時間的、あるいは、空間的に離れた場所に投影する。そのとき、社会契約はそれを過去に投影し、ユートピアは未来、もしくは、遠く離れた場所に投影する<sup>3</sup>

この点で、「黄金時代」や「地上楽園」の一部は、モダン・ユートピアの範疇から除外されている。これらは、一般的に過去の理想社会を提示するからである。第二に、理想社会を構築する社会的制度の有無という点である。ダーコ・スーヴィン (Darko Suvin) は、「地上楽園」や「コケイン・逸楽の国」が、「不幸や、病気、不正を除外する鍵として社会政治的な機構に焦点を当てるといふモアの偉大な発明を欠いている」点を指摘する<sup>4</sup>。ある種の夢物語 (wishdream) であるところの「地上楽園」や「コケイン・逸楽の国」は、モダン・ユートピアが作り出すより現実的なヴィジョンとは、相容れないものなのである。また、サー・フィリップ・シドニー (Sir Philip Sidney) がモアの『ユートピア』について述べているように、モダン・ユートピアは、一般の人々が暮らしている場所であり、その点で、プ

ラトンの描いた哲人の国とは、意を異にする<sup>5</sup>。ユートピア国の桂冠詩人であるアネモリウス (Anemolius) の詩は、その差異を明快に謳いあげている。

'No-Place' was once my name, I lay so far ;  
But now with Plato's state I can compare,  
Perhaps outdo her (for what he drew  
In empty words I have made live anew  
In men and wealth, as well as splendid laws) :  
'The Good Place' they should call me, with good cause.<sup>6</sup>

法体系に拠らず、全人的に完成された社会構成員のみで作られた社会であるという点をもって、その社会の理想性を確保しようとする試みは、ここに否定されているといえる。実際、哲人や聖人だけが暮らす社会は、モア以降のユートピアからは、完全に姿を消している。モダン・ユートピアの歴史は、このように『ユートピア』という作品に始まるのであり、その範疇は、モアによって定められている。

このような差異化によって、われわれは、モア以降の狭義のユートピア文学、モダン・ユートピアの特徴を明確にすることができている。それは、第一に、現在、または、未来にある理想社会のヴィジョンを描くものでなければならぬ。また、それは、特別な資格を有していない普通の人々が暮らす土地でなければならない。そして、これが最も重要な構成要素となるのだが、その理想社会は、政治的社会的な制度によって、その理想性を保持しなければならないのである。モア以降のユートピア作品には、「ユートピア」という言葉が生み出す理想性がさらに付け加えられている点に、さらに、われわれは注目しなければならない。「よき場所」としてのユートピアの完全性は、それが「どこにもない場所」であることによって、読者に強固に植え付けられる。ユートピアを読むとき、読者は「どこにもないほどによき場所」の物語という前提を強制されているからである。このよう

な特徴をもつ理想社会を、われわれはモダン・ユートピアと呼ぶことができるのである。

しかしながら、その一方で、「どこにもない場所」という認識論上の位置付けは、理想社会が現実性を有することに激しく抵抗し、その結果、現実性と虚構性の弁別を無意味化する方向に作用する。この言葉は、時間的にも、また、歴史的にも、われわれは決して理想社会に到達できないことを示しているからである。ユートピアの社会制度は、それが実現可能であるほど現実的に描かれなければならない。その一方、それは完全な虚構性をも同時に獲得しているのである。ユートピア物語に描かれる社会が、いかに現実的な社会制度によって、その理想性を保持しているように見えても、その社会は、決定的な虚構性に貫かれている。いわば、理想社会の認識論上の位置付けは、強固なリアリズムと徹底的な虚構性によって、常に二重化されているのである。

当然のことながら、物語全体を支配する「placelessness: 無土地性」は、モダン・ユートピアの枠組みを支配する。この事実が指し示す意味を、クリシャン・クマー (Krishan Kumar) はこう説明する。

モアの『ユートピア』は、次の500年にわたってユートピアという領域をはっきりと確定した特別な文学的発明である。……その歴史のなかにもいくつかの区分が存在する。しかしより印象的なのは、それほど長い年月にわたって形式の連続性が見られることである<sup>7</sup>。

モダン・ユートピアは、モアの『ユートピア』という特定の作品によって決定づけられた文学の範疇であるが故に、その最大の特徴である「placelessness: 無土地性」は、幾つかのユートピアの伝統を形成し続けてきたのである。

そのような形式的伝統のひとつに、到達不可能な土地であるが故の工夫がある。理想社会は、空間的、時間的にはるかに離れた土地でなけれ

ばならないからである。ルネサンス期には、それは、モアの場合のように、遠く離れた島を意味していた。1770年に描かれたセバスティアン・メルシエール (Sebastian Mercier) の『2440年』(L'An 2440)以降、理想社会は未来に置かれることも珍しくなくなったし、H.G. ウェルズ (H.G. Wells) が『現代のユートピア』(A Modern Utopia) で試みたように、はるか宇宙のかなたにユートピアを描く場合も現在では少なくない。そして、旅行者たちは、クマーが指摘するように、さまざまな手段で、必然的に再現性のない旅行を行うのである<sup>8</sup>。

この旅行者もまた、「placelessness: 無土地性」があるが故の枠組みに縛られている。旅行の再現性を慎重に剥ぎ取らねばならないため、その存在を現実的に描くことは、ユートピアの定義上不可能だからである。例えば、モアの『ユートピア』における旅行者は、ラファエル・ヒスロデイ (Raphael Hythloday) という名であるが、ヒスロデイとは、「ナンセンスのエキスパート」という意味であり、また、ラファエルとは、「ガイド」という意味に過ぎない<sup>9</sup>。いわば、ユートピアの旅行者は、存在のない存在なのであり、彼らは常に「nameless: 無名」でなければならぬのである。

しかし、そのような修辭上の工夫によって、モダン・ユートピアは、他の文学ジャンルには想定しにくい奇妙な再現前 (representation) 能力を手に入れた。ユートピア物語に描かれている理想社会は、それが特定の場所を持っていないが故に、現実社会のイデオロギーから独立しているからである。認識論上特定し得ない場所に位置付けられたユートピアの特殊な空間は、その理想性を、現実社会に対抗し得るものとして、現実社会からの批判を受け付けることなく提示する。それ故、ルイ・マラン (Louis Marin) は、ユートピア物語を「イデオロギーのイデオロギー的批判」と定義するのである<sup>10</sup>。このような観点から解釈される理想社会ユートピアとは、現実から独立した純粋な批判媒体なのである。

従って、ユートピア物語を読むという行為は、読者に現実社会の客観化と異化 (defamiliarization) を強制する。このとき、理想社会が再現前化されると同時に、現実社会は、いわば、再現前化されるのである。

フランシス・ベーコン (Francis Bacon) の『新アトランティス』(New Atlantis)<sup>1</sup> もまた、このようなモダン・ユートピアの諸特徴を兼ね備えたユートピア物語である。ベーコンが華やかな政界から身を引き、思索と執筆活動にその能力を傾けているさなかに、この『新アトランティス』という短い「寓話」は描かれた<sup>1)</sup>。以来、この作品には様々な評価が与えられてきた。肯定的な意見も少なくはないが、作品自体が未完であることもあって、否定的な批判にもさらされてきた。また、未完であるが故に、華やかなルネサンス・ユートピア文学の作品群の中で、この作品の研究は比較的遅れている感がある。しかしながら、科学を原動力とするユートピアの構築をルネサンス期に構想したという点だけをとり、この作品の文学史上の意味は大きいといえるだろう。そこで本稿では、この作品のユートピア文学史上における位置付けを、とりわけ科学とユートピアの関係から再考したい。

## II.

ベーコンは、一見すると、明らかなユートピア物語を描いている。ベンサレム (Bensalem) という名の島は、「天使の土地であり、しかもその天使たちは、日々われわれのところにも現れ、われわれが考えもしていないし、ましてや期待してなどいなかったようなお恵みを準備して下さっていた」(158)と述べられているように、ま

さしく理想の島、ユートピアであり、その位置付けは、ルネサンス期のユートピア物語の典型である。

この作品が踏襲しているある意味で伝統的な修辞上の特徴は、枚挙に暇がない。第一に、旅行者は、完全に「nameless: 無名」であり、旅行の手段も、嵐のために遠く離れたところにいるの間にか辿り着いたという設定になっている。これは、ユートピアの「placelessness: 無土地性」を強く主張するもので、再現性のない旅行を保証している。第二に、ベーコンは、人的交流が実質的に皆無に近いことを意識的に提示する。外国人は、37年もの間誰もベンサレムの島を訪れていなかったというのである(158)。さらに、その理想社会は、諸外国の知識や文化を取り入れるために選ばれた極少数の人員を除けば、国民の外国旅行を禁じてさえいるのである(167)。このようなユートピアの独立性は、モアの作品にも見ることができ、ユートピアが「placeless: どこにもない場所」であることを強固に印象付けるための確立されたパタンのうちのひとつなのである。第三に、これも、モアの作品にその例を見ることができるよう、ユートピア社会の独立性が経済的にも保証されている。ベンサレムの島は、その「大部分が珍しいほど豊穡な土地で覆われており、船舶も十分に機能するので、漁業はもちろん、国内の港湾間の輸送はたやすく、法令が共通している統治下の島々への渡航も可能である」ため、「外国からの援助をまったく受けずとも自国を維持できる」のである(165-6)。強固な独立性の提示は、ユートピアの現実社会のイデオロギーからの不可侵性を強化する。それ故、この修辞上の形式は、モダン・ユートピアの根幹をなすものである。第四に、ベーコンのユートピアは、外国人に対する取り扱いや、結婚等のしきたりにその例が見られるように、極めて統率の取れた制度にのっとり構築されている。そのような法規が、1900年も前に制定されているという前提からもわかる通り(165)、この国は、一見現

i 本稿で使用するテキストは、Francis Bacon, "New Atlantis," *Three Early Modern Utopias*. Oxford World Classics. (Oxford UP, 1999), pp 149-86 とする。以下本テキストからの引用はページ数のみを( )に示す。なお、本稿中の引用は、特に訳者が記載されている場合を除いて高橋訳である。

実社会に換わり得る制度をもっている。以上のような、物語の背景をなす種々の形式は、全て、モアの『ユートピア』に始まるのであり、その意味でこの作品は、まさしく、典型的なモダン・ユートピアなのである。

当然のことながら、ベーコンは、既成のユートピア諸作品を念頭においていたに違いない。『新アトランティス』というタイトルからも、彼がプラトンの作品を意識しているのは、明らかであるが、トマス・モアの作品に対する言及があることも見逃してはならないだろう（174）。ベーコン自身の意図が、「法体系の構築、あるいは、最善の状態の構築、もしくは、最善の国家の形態を作り上げることにあったとするローリーの指摘からも用意に推測できるように、ベーコンの著作の姿勢は、第一義的には、この作品を伝統的なルネサンスのユートピア文学の範疇に位置付けようとするところにあったと推測すべきである<sup>12</sup>。

### III.

伝統的ユートピアの形式を踏襲しようとする一方で、前述したように、ベーコンは理想社会構築の推進力を科学に求めるという冒険的な試みに挑んでいる。作品中に登場する想像上の機関や装置、機械などは、科学的な実験の成果と知識によって生み出されたものである。そこには、一種の発電所をはじめとして、目を見張るほどの高さの気象などを観測するための塔、驚くほどの数の研究所、動物園や植物園といったものまで挙げられている。ベーコンの理想社会には、科学研究がもたらす恩恵が散りばめられているのである。

実際、この作品のユートピア史上の評価は、ユートピアに科学を導入したことによって決定付けられているとあってよい。例えば、グレン・ネグレイ（Glenn Negley）とJ・マックス・パトリック（J. Max Patrick）は、以下のように述べて、この作品が後代に与えた影響の大きさを強調する。

を強調する。

ベーコンの影響によって、ゴット（Gott）は彼の著作である『新エルサレム』（*Nova Solyma*）の中で、科学的実験に何らかの注意を払ったのだし、ウインスタンリー（Winstanley）は、科学を称えることで、恐らくは彼の最も傑出した散文を著した。1660年にR. H. は『続新アトランティス』（*New Atlantis Continued*）を描いているが、その作品は、立憲君主制に対する追従とともに、科学の可能性への賛辞を詠ったものである。それ以降というものは、ほとんど全てのユートピアが、完全社会における科学の重要性に何らかの注意を払ったのである<sup>13</sup>。

もちろん、ルネサンス期のユートピアには科学を題材としたものが他にないわけではない。クマーが指摘するように、恐らくは、トマス・カンパネルラ（Thomaso Campanella）の『太陽の都』（*The City of the Sun*）が、「科学と科学研究をそのヴィジョンの中心に据えた最初のユートピアとの賞賛を受ける」ものであろう<sup>14</sup>。それでもなお、ユートピア文学史上の影響を考察するに当たっては、ベーコンの作品こそ重視されるべきである。それ故、エルンスト・ブロッホ（Ernst Bloch）は、「テクノロジーを題材にしたユートピアは、カンパネルラの作品が最初に印刷されたものであるが、次に、それが極めて明確な形となって現れているのはベーコンの『新アトランティス』である」と述べて、両者の評価を弁別しているのである<sup>15</sup>。ウェルズの「ベーコンのユートピアは、これまでに描かれたどのユートピアにもまして、現実的な帰結に基づいた形で創作されている」という評価も、この作品が科学を推進力にして理想社会を構築した点に、その根拠があると見るべきであろう<sup>16</sup>。『新アトランティス』は科学とユートピアの関係を新たに切り開いた、あるいは、切り開こうとしたという点において、評価されなければなら

ないのである。

しかしながら、科学のユートピアへの導入は、同時に、ルネサンス・ユートピアのパタンの一角を切り崩す危険性をはらんでいる。ユートピアという言葉の中にある理想社会は、それが「placeless: どこにもない場所」であるが故に、完全性を要求するものである。ところが、一方科学は、それが進歩しつづけるが故に、換言すれば、完全性を目指しているが故に、ユートピアの推進力となる。科学を原動力とするユートピアは、「いつか完全になる社会」であり、「今、完全である社会」ではない。このような観点から、クマーは、その危険性をこう指摘する。

モアの平等主義が古代の理想都市の階層的構造を破壊したように、ベーコンの科学は、モアも含めてモアに至るすべての理想社会の特徴である停滞性を突破した。ベーコンの時代以降、民主主義と科学が近代のユートピアの明示的あるいは暗示的な前提条件となったのである。そしてユートピアの平等主義が時にその合理主義と対立したように、科学の力動性はユートピアの境界を越えてしまう恐れがあった<sup>17</sup>。

ベーコンのユートピアは、ユートピア文学の新しい地平を開く可能性を秘めてはいるものの、それは同時に、ルネサンス・ユートピアの形式を破壊する能力も有しているのである。

科学を社会的改善のよすがとすると、ユートピアは、危機に直面する。実際、ベーコンの描く理想社会は、科学と科学実験の殿堂であり、ベンサレムの中心でもあるサロモン館(Salomon's House)の設立の趣旨において、その完全性が早くも疑問に付されることとなる。サロモン館の長老の一人は、こう高らかに述べている。「われわれの協会の目的は、事物の根源にせまり、物質の隠れた運動を理解することにある。また、人間の帝国の領域を拡大し、それをもって、あらゆることを可能にしようとする

ものである」(177)。この主張が意味するところは大きいといわなければならない。明らかに科学的探究をその設立の目的とするこの協会が、ベーコンのユートピアの理想性を根底で支えている以上、ベーコンのユートピアは、決して完全性をもつに至らないユートピアになるからである。実際、サロモンの館には、「ランプ」(Lamp)という名で呼ばれている科学的進歩の確認を専門に行う集団があって、その名のとおり、彼らが科学的研究の方向性を指し示す作業を行っているのだが、彼らの業務は

以前の仕事や収集の成果を考察するために、われわれが総員で会合や会議を開いた後に、それらの中から、より高い知識の糧になるような、また、自然に対して一層詳しい洞察を加えることになるような、新しい実験を指揮監督する(185)

ことであると説明されているのである。われわれは、ベーコンが注意深く比較級を用いていることに注意しなければならない。より高い(higher)知識の糧となり、自然に対して一層詳しい(more profound)洞察を加える科学の成果は、今この時点で成立しているのではない。ベーコンのユートピアは、ユートピア自体の完全性を永久に手に入れることはできないのである。

その結果、モダン・ユートピアは、新たな形式を求めざるを得ない。科学は、進歩するユートピアを要求し、それに応えるには、ユートピア自体を時間的な観点からダイナミックに描かなければならないからである。それ故、フライは、

テクノロジーとは、進歩するものであるから、ユートピアに至る道程は、空間的なものではなく、時間的な旅行に次第しいに傾いてきている。ユートピアは、未来のヴィジョンとなり、地球上のどこか離れた場所ではなく

なってきたのだ<sup>18</sup>。

と指摘しているのである。しかしながら、そのような文学上の形式は、前述のメルシエールの『2440年』まで待たなければならない。

このような観点から『新アトランティス』を再考するとき、ベーコンのユートピアが必然的に破綻しているのは、むしろ当然である。「世界を映し出す鏡の中で、人の目を注ぐべきものがあるとすれば、それこそはこの国である」(169)と科学が推進する理想社会のあり方を称えるベーコンは、科学のダイナミズムと理想社会の完全性を併記せざるを得なかった。理想社会を打ち立てたソラモナ(Solamona)王は、自国が幸福で豊かであることを思い返して、「悪しき方向に変える方法は何千とあるが、この国をさらに良くする方法はない」として、ベンサレムの島に理想的な制度を整えたのである(166)。ここで、さらに良くする(better)という比較級が示唆しているのは、科学のダイナミズムとの明らかな矛盾に他ならない。科学は、社会を「より良く」改善するからこそ、ユートピアの推進力たり得るからである。ベーコンが企てた科学的ユートピアは、彼自身を呪縛しているのである。

われわれは、科学によるユートピアの推進を前提とする場合、科学研究自体の進歩がそのユートピア性を保証するものであるから、その社会には、科学研究の危険性自体に対する抵抗力が皆無といってよい点にも注意を向ける必要がある。この点から見ても、ベーコンのユートピアには、致命的な欠点が存在しているからである。平和で自由なルネサンス・ユートピアの伝統からかけ離れた問題が、平然と持ち込まれてしまっているのである。例えば、クリスティン・リーズ(Christine Rees)は、「戦争自体が、純粋に技術的な問題となってしまう」ことを、特に問題として取り上げる。サロモン館での火器の研究は、航海術や音楽などといった研究とまったく同列に扱われていることを指摘

するリーズは、その矛盾こそが、科学を導入した結果に他ならないと主張している<sup>19</sup>。結果として、ベーコンのユートピアは、科学に対して無力であることを露呈しているのである。

このような状況において、ユートピアの理想性を維持するためにベーコンがとった手段は、皮肉なことに、さらにユートピアの理想性を覆す方向に作用している。リーズが指摘するように、それは、徹底した秘密主義である。

われわれは会議を開いて、作り出した発明や経験した物事のうち、どれを発表して、どれをそうしないでおくのかということを決めている。秘密にしておくべきものと決した内容に関しては、われわれは、秘密を保つ旨の宣誓を総員で行うのである。このうち、ある種のものに関しては、国家にこれを知らしめる場合もあるが、そうでない場合もある(184)。

科学が推進する理想社会にあって、科学の野放図な進歩が理想性を破壊しないようにくい止める手段は、情報操作以外にはないことは明らかである。科学の力動性を肯定的に評価する手段を持たなかったベーコンは、秘密主義による悪の隠蔽に頼らざるを得なかったのである。

国家と科学の対立が、前述の引用の最後の一文に極端な形で前景化しているのは明らかであるが、ベーコンが必然的に帰着してしまった破綻と矛盾を知るとき、われわれが直面するのは、完全に政治的な課題に他ならない。このような対立は、専らベーコンの政治的関心のうちに内包されていたからである。『学問の発達』の中で、ベーコンはこう述べている。「政治的な行為の場合には、他人を自分の意志と目的の道具にしなから、しかも、それらの人に自分の目的を知らせないようにすることが、一層偉大で思慮深い政治家なのである」<sup>20</sup>。ベーコンにとって秘密主義は、政治家が現実社会において問題を解決する際に選択できる手段として評価すべきものであったのだ。この点で、ベーコンのユートピア

は、彼自身の政治的な課題を露呈するものとなっているのである。

ところで、ユートピアは、現実社会の「諸問題が完全に新しい生活様式の中で解決されるものとして示されるように想像を働かせた秩序の再構築」でなければならない<sup>21</sup>。この秩序の再構築が、「nameless: 無名」な旅行者によって紹介されるとき、それが「placeless: どこにもない」ことを利用して、現実社会のイデオロギーに対峙し、それと換わり得るもうひとつのイデオロギーが、現実社会からの批判を回避しながら提示され得るのである。優れたユートピア作品は、それ故、現実社会の時代的、地理的な背景を無視して、直接的に読者に作用する。ルシア・フォリーナ (Lucia Folea) は、現実社会に換わりうる秩序の提示は、その「namelessness: 無名性」と「placelessness: 無土地性」が提喩的に解釈できるが故に、普遍的な価値を手にし得るとして、ユートピア物語の「理想的な読者は、政治的な権力に関する明確な問いかけがあるが故に、グループもしくはコンテンポラリーな制度との対話的な関係によってその存在を認識できる文化でさえある」と主張している<sup>22</sup>。ユートピアの文学としての価値は、従って、少なくとも一見するところ完全な新しい秩序の再構築の実現にあるはずなのだ。

われわれは、ベーコンのユートピアには、この点で重大な瑕疵があることを見逃してはならない。現実社会の政治的な課題は、ユートピアの秩序の中で解決していなければならないからである。しかしながら、『新アトランティス』の中で読者が突きつけられているのは、国家と科学の対立を秘密主義によって覆い隠そうとする隠蔽に過ぎない。ベーコンが、科学の推進する理想社会を構築しようとした冒険的な試みは、現実社会に存在した政治的課題を、解決することはなく、むしろそれを強調する方向に作用しているのである。

『新アトランティス』は、今や、その理想社会に現実的な論点が介入することを拒否できな

い。ベンサレムの物語は、国家と科学という現実的な対抗軸によって、ユートピアというよりはベーコンの生きたイングランドを異化することなく再現前化している。科学的なユートピアの構築は、ベーコン自身の手によって、その矛盾を露呈し、それを隠蔽するためにとった手段は、「placeless: どこにもない」はずであった理想社会に、特定の社会を内在化させている。強固な虚構性を持つが故のユートピアのイデオロギー批判の媒体としての機能は、もはや存在していない。『新アトランティス』は、ベーコンの手によってユートピア物語の範疇から逸脱しているのである。

#### IV.

この物語がユートピア文学において果たした役割は、確かに重要であったろう。それは、多くの批評家が評価するように、第一義的には、この物語が科学の推進するユートピアを描くという壮大な実験であったからである。クマーが指摘するように、この作品は、啓蒙期にはモアの作品と並んで、一種の確立されたユートピアのバタンとして、模倣の対象ですらあったのである<sup>23</sup>。

しかしながら、さらに重要なのは、この作品がルネサンス・ユートピアの伝統を忠実に再現していたという点である。このことを想起するとき、われわれは、この物語がユートピア文学史上に投じた波紋に瞠目せざるを得ない。モアに始まるルネサンス・ユートピアの形式を、この作品は形骸化したのである。モダン・ユートピアの意義とは、すなわち、現実社会の変化の可能性を、イデオロギーによるイデオロギー批判を実現することで示すところにある。しかし、ベーコンのユートピアは、現実社会の政治的論点が強固に介入した結果、「placelessness: 無土地性」を喪失しており、理想社会のイデオロギーが現実社会からの独立性を保持できていない。換言すれば、科学を導入することによって、



ユートピアが現実社会に換わりうるイデオロギーを提示するという用途は、完全に破綻しているのである。その結果、それまでのユートピアの形式は、空虚な器となっている。旅行者が「nameless: 無名」であること、ユートピアの自己充足性といった「placeless: どこにもない」ことの保証などに代表されるモダン・ユートピアの修辞上の形式は、ユートピア物語の提示する理想社会が、イデオロギー的に現実社会を批判するために必要なものであった。しかし、ベーコンの物語は、その目的を達成できていない。修辞上の解釈は、『新アトランティス』が、モダン・ユートピアの形式のコピーに過ぎないことを明らかにしているのである。

それでは、科学をユートピアに導入した功績と、モダン・ユートピアの形式を形骸化したという事実は、ユートピア史上でどのように評価されるべきなのであろうか。クマーは、ユートピア文学の歴史上の特徴を、以下のように指摘する。

16世紀と17世紀には力強い潮流であったものが、18世紀の終わりには目標と方向性を見失ってしまったように思われる。きちんとした文学形式としては、19世紀の大半、ユートピアは西欧思想の片隅へと追いやられていた。……19世紀の終わりに至って、文学におけるユートピアは、完全に成長し自立した形式として再登場する<sup>24</sup>。

換言すれば、ルネサンス期に始まるモダン・ユートピアの歴史には、ルネサンス時代と、科学の進歩を社会の進歩としてダイナミックに描く手法が確立された19世紀後半との間に、断裂が存在しているのである<sup>25</sup>。この断裂を生じさせたのが、ベーコンの『新アトランティス』であることは明白である。この作品の出現から、「近代世界の最も新しくそして基本となる発展の成果である科学革命を組み込まなければ、モダン・ユートピアに値しない」という前提が、あ

らゆるユートピア作品に強制されたからである<sup>26</sup>。この作品は、ルネサンス期の静的で地理的なユートピアの拡大再生産に終止符を打ち、ユートピア物語の新たな修辞法の確立を要請するものだったのである。

『新アトランティス』は、決して傑作などではない。「この作品は断片に過ぎない。それに非常に拙劣な断片である」とルイス・マンフォード(Lewis Mumford)が指摘するように、その文体は冗漫で、工夫に欠けている。特に、ことさら冗長な登場人物たちの衣服の描写や、ほとんど変化のない口調で延々と続くサロモン館の研究機関の紹介は、芸術的に評価するに値しない。ある意味で、ベーコンの「理想は信じられないほど子供っぽく、矛盾している」のである<sup>27</sup>。ダイナミックなユートピアを構築する術のないベーコンは、自らが選んだ実験に失敗しているのである。

しかしながら、この作品の文学史上の価値は、それでもなお有意義といわなければならないだろう。ユートピア文学の新しい形式を創想するためには、この作品のもつ衝撃が必要だったのである。このような立場にたつとき、われわれは、リーズも指摘している通り、この物語が未完であることを示唆的にとらえることができるだろう<sup>28</sup>。『新アトランティス』は、そこに内包されたユートピア物語としての矛盾によって、未完に終わるべく強制されているのは確かであるが、ユートピア文学の歴史がこの物語を引き継いで、その200年後に、ベーコンの意図したユートピアを完成させているからである。

## 注

- 1 Thomas More, *Utopia*, *Thomas More: Utopia: Latin Text and English Translation*, eds. George M. Logan, Robert M. Adams, and Clarence H. Miller (Cambridge: Cambridge UP, 1995) p. 13, n.
- 2 See, Frederick Engels, "Socialism: Utopian and Scientific," *The Marx Engels Reader*, pp.

- 691-4.
- 3 Northrop Frye, "Varieties of Literary Utopias," p.25, in *Utopias and Utopian Thought*, ed. Frank E. Manuel, (London: Souvenir Press), pp. 25-49.
  - 4 Darko Suvin, *Metamorphoses of Science Fiction: On the Politics and History of a Literary Genre* (New Heaven: Yale UP, 1979), p. 58.
  - 5 See, *Sir Philip Sidney, Sidney's Apologie for Poetrie*, ed., J. Churton Collins, (Oxford: Clarendon Press, 1907), p. 3.
  - 6 More, p. 19.
  - 7 クリシヤン・クマー, 『ユートピアニズム』(菊地理夫, 有賀誠訳, 昭和堂, 1993年), p. 43.
  - 8 *Ibid.*, p. 43.
  - 9 More, p. 35, n.
  - 10 ルイ・マラン, 『ユートピア的なもの』(梶野吉郎訳, 法政大学出版局, 1995年), p. 273.
  - 11 『新アトランティス』の成立年は確定されていない。しかし, それを1624年とする研究者は少なくない。この当時, ベーコンは, すでに大法官の職を罷免され, 邸宅のあったゴランベリーで隠遁生活を送っていた。1627年にこの作品は出版されているが, その初版から, ベーコンの秘書官であり, 彼の伝記作者でもあるローリー(William Rawley, 1588-1667)による序文がついていた。ここでローリーは, この作品を「寓話」(fable)と述べている(151)。
  - 12 ローリーは, 『新アトランティス』をより大きなベーコンの著作活動の一環をなすものと紹介している。(151)
  - 13 Glenn Negley and J. Max Patrick, *The Quest for Utopia: An Anthology of Imaginary Societies* (New York: Henry Schuman, Inc., 1952), p. 292.
  - 14 Krishan Kumar, *Utopia and Anti-Utopia in Modern Times* (Cambridge: Basil Blackwell, 1987), p. 30.
  - 15 Ernst Bloch, *The Utopian Function of Art and Literature: Selected Essays*, trans. Jack Zips and Frank Mecklenburg (London: The MIT Press, 1993), p. 5.
  - 16 この一節は, Kumar, *Utopia and Anti-Utopia*, p. 30より引用した。なお, 原典は, H.G. Wells, 'Utopias' (1939), *Science Fiction Studies*, vol. 9, part 2 (1982), p. 120.
  - 17 『ユートピアニズム』 p. 90
  - 18 Frye, p. 28.
  - 19 Christine Rees, *Utopian Imagination and Eighteenth-Century Fiction* (London and New York: Longman Group Ltd., 1996), p. 43.
  - 20 フランシス・ベーコン, 「学問の発達」, 『世界の名著第25巻ベーコン』(成田成寿訳, 中央公論社, 1979年), p. 359.
  - 21 『ユートピアニズム』 pp. 145-6.
  - 22 Lucia Folena, *History and Forms: Renaissance Culture and its Others*, diss., University of California, San Diego, 1991, (Ann Arbor: UMI, 1994, 9216486), p. 82.
  - 23 『ユートピアニズム』 p. 77.
  - 24 *Ibid.*, p. 79.
  - 25 Kumar, *Utopia and Anti-Utopia*, p. 31-2を参照のこと。
  - 26 *Ibid.*, p. 30.
  - 27 ルイス・マンフォード, 『ユートピアの系譜』(関裕三郎訳, 新泉社, 2000年), pp. 103-5.
  - 28 Rees, p. 43.